

平成30年度商工部会行事

世界農業遺産（にし阿波の傾斜地農耕システム）



意見交換・現地見学会

徳島県南部総合県民局（阿南）

多田 圭一

Tada Keiichi

（農業部門・総合技術管理部門）

商工部会では、去る11月23日（勤労感謝の日）・美馬市穴吹町にて、世界農業遺産に認定された「にし阿波傾斜地農業システム」の現地見学・意見交換会を開催し、会員12人の参加を頂きました。穴吹駅に集合し、マイクロバスに乘車。30分ほど山道を登りました。途中、70人もの若者集団が、路よで食事している景色に出会い、驚きました。後で聞くと徳島大学生物資源産業学部の校外授業だということでした。やがて、穴吹町瀬名の農村レストラン風和里（ふわり）に到着しました。

徳島大学 内藤准教授（文化人類学専攻）に、にし阿波傾斜地農業を紹介して頂きましたが、講義内容はこの地域にとどまらず、グローバルな、とても濃いものでした。

・集落の家々は傾斜地に建てられ、傾斜30度から40度の地域に多く分布する。この角度は土砂の安定角。昔ながらの農業技術や生活スタイルが理にかなっている事が科学的にも裏づけられてきている。

・世界農業遺産は、途上国の農業を守るために始まった。今も家族的農業が世界の農産物の8割を支えている。世界各地で残る「生きた農業」は、食料の安定供給と環境保全を両立させるもので、世界農業遺産は、その促進のために認定するものである。

・例として、東アフリカ・マサイ族の牧畜は、灌漑農法や観光よりも生産性が高いとの研究報告がある。多国籍企業による大規模農業は安く生産できるが、消費者は食の主権を奪われており、何を食べさせられているか分からない

・農業遺産に登録されたので、次は、農の楽しみ（食う・学ぶ・交流する）をシェアすることが必要である。



内藤准教授の講義

昼食には、地元の野菜中心に作ったおでん、蕨物、和え物といった、ヘルシーで美味しい料理を頂きました。午後は、レストランのオーナー小泉氏の案内で、周辺の傾斜畑を回りました。近くにかや(ススキなど)を刈り取る採草場があり、かやを束ね立て掛ける「コエグロ」という古来からの方法で乾燥していました。かやは、その後、傾斜畑に細かくして敷き込むのですが、この方法は土壌の流出に効果があるそうです。

この地域では、蕎麦、ゴウシュウイモ、ヒエ、キビなど多様な作物が栽培されています。サラエ等、地域独特の農具で土を耕していますが、今では鍛冶屋がなくなり、こうした農具を今後作ってくれる人が出来ないのが悩みだという話を伺いました。



「コエグロ」のある風景



サラエ等の農具

この日は天気も良く、高地から素晴らしい景色を眺めることができました。高越山がすぐそばにそびえ、眼下に吉野川、遠くには淡路島まで臨める、絶景のロケーションです。日によっては雲海が広がるこの地域は、まさに桃源郷のようでした。

マイクロバスから見かけた徳大生や他のグループの方々も登って来て、賑わいがありました。世界農業遺産に認定され、一般への周知が進んでいる様子でした。内藤先生が今後の展開として「農業で食う、学ぶ、交流する、楽しむことを広げる」と言われたとおりになりつつあります。

小泉氏に聞くと、「過疎化が進むこの地域を何とかしたいという想いでレストランをつくった。世界遺産になるとも思っていなかったし、これだけ、多くの人が来るとは思わなかった」と感慨深げでした。

最後になりましたが、今回の意見交換・見学会は、徳島県西部県民局農林水産部の日本世界農業遺産・世界農業遺産担当の方に大変お世話になりました。厚くお礼申し上げます。

会員の皆様、ぜひ、機会があれば、「にし阿波」(美馬市・三好市・つるぎ町・東みよし市)の世界農業遺産認定地域に出かけてみて下さい。

簡単ですが、報告とさせていただきます。